

# 『イデーニ II』における身体構成について

—「二重感覚」の再考から—

小林 秀 樹

フッサールは『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』第二巻「構成についての現象学的諸研究」(以下『イデーニ II』)<sup>(1)</sup>において、意識作用が構成する諸対象を「物質的自然」、  
「有心的(animalish)自然」、「精神的世界」の三領域に分け、その現象学的構成分析を行っている。本稿ではこの領域的存在論において横断的に論じられている身体(Leib)の構成を問題とする。これまで身体の現象学的構成の理論については、もっぱら二重感覚(Doppelempfindung)についての分析やキネステーゼ(Kinästhesie)概念が中心に論じられてきた。確かにそれらは身体構成において重要な役割を果たすものであるが、本稿では二重感覚にもとづく身体構成のみならず、特に身体がもつとされる「能力(Vermögen)」すなわち「私はできる(Ich kann)」をも含んだ身体の構成分析を試みたい。二重感覚の分析には、すでに「私はできる」が前提とされており、二重感覚の成立はこの「能力」に依拠するところが大きいためである。

そこでまず「物質的自然」の構成とそこにおける身体の役割を概観する。「物質的自然」の構成は、身体の構成を分析する際のモデルとされているためである。そして次に身体構成の分析として、「有心的自然」の構成における二重感覚の分析について再考する。ここでは二重感覚に見られる「触れる—触れられる」という体制の中に、人格のないし精神的な自我に属する事柄が持ち込まれている(IV, 143)ことを具体的に明らかにする。そして身体に自明に帰属するかのように論じられてきた「能力」あるいは「私はできる」もまた、純粹自我による自己統覚であって、現象学的な構成分析に付されなければならないことを指摘し、この構成分析が人格主義的態度における了解的(komprehensiv)経験を手がかりとして解明される可能性を探ることとしたい。この試みは人格的自我の構成において身体が不可分な役割を果たし、その際同時に他者の契機が必要となることを明らかにするであろう。

## 1. 物質的(materiell)自然の構成と身体

身体は、まず物質的事物の現出と構成において重要な役割を果たす。身体はあらゆる「知覚の手段(Mittel)」であり「知覚器官(Wahrnehmungsorgan)」であって、「あらゆる知覚に必然的に関与している」(IV, 56)。フッサールはここで身体と世界現出との独特の相関関係を

(1)

述べようとしている。

空間的な事物性が構成される際、身体は全く異なった構成機能を持つ二種類の感覚を共働させている。第一の感覚はいわゆる感覚与件である。感覚与件は「統握されることにより、それらに対応する事物そのものの諸徴表を射影しながら構成する」(IV,57)。感覚された赤い色は、統握されることで広がりあるリンゴの色として、またつるつるした感覚は統握されることによって、リンゴのつるつるした表面として現出する。他方第二の感覚とは、第一の感覚と不可分に結びついている運動の感覚である。我々は知覚の際に目や頭を動かすが、それに応じて一連の感覚が経過する。このとき感覚与件は身体の運動に合わせて「もし～ならば、こうだ(wenn-so)」とか「～だから、こうだ(weil-so)」という関係の中で統握される。この第二の感覚は「運動感覚」あるいは「キネステーゼ感覚」と呼ばれる。キネステーゼ感覚の一連の自由な経過が諸感覚の統握を動機づけており、それによって事物は延長ある徴表を持ちうるのである。

したがって身体は知覚器官であるが、あくまでそれは「自由に動く感覚器官」としての身体であって、「知覚はつねに、本質的に二種類の互いに相関関係にある機能の共働から生じる能作(Leistung)の統一」(IV,58)に他ならない。世界はこのようにして身体を中心として現出し、常に方向定位の原点としての「今ここ」において現出する。私たちは感官の働きを通じ、絶えず世界構成の中心であり続ける。その意味で身体は、常に主観と世界の媒体なのである。

こうした身体の働きは、通常気づかれることなく意識の背景に退いているが、やはり私の身体もまた「ここ」という位置を占める物質的事物である。そのためこの身体自身の構成が物質的事物の構成と類比的に問われうる。しかし当然この身体とは単なる物質的事物ではない。単なる物質的事物とこの身体との構成上の差異は、フッサールにおいては身体が身体に触れるという事例をもって、すなわち身体が知覚器官でありつつ物質的事物でもあるといういわゆる二重感覚の事例をもって論じられる。そこで次に身体構成の分析として、二重感覚をめぐるフッサールの考察を検討することとする。

## 2. 二重感覚の概要

二重感覚とは何か。フッサールが挙げる具体例は、両手相互の触覚的現出である。右手が左手を撫でるとする場合、右手にはキネステーゼ感覚と共に肌荒れや滑らかさなどの感覚が、左手という物質的事物が持つ諸性質として統握され現出する。しかしこのとき身体構成にとってより本質的であることは、右手だけでなく同時に左手にも触感覚(Tastempfindung)が感じられるということである。キネステーゼ感覚は触覚と連携し、左手という空間物体に触感覚を局所づけるのである。この局所づけられた感覚は「感覚態(Empfindnis)」と呼ばれる。しかしこの感覚は、左手の物理的事物としての規定(滑らかさなどの諸性質)を豊かにする

ものではない。この感覚態は、触れられるという仕方で「その事物が身体となり、その事物が感覚する」(IV,145)ことに他ならない。右手が触れる物理的(physisch)事物(左手)は、触れられることで直ちに感覚態となるのであり、同じ触感覚が、一方では徴表を示す感覚として、他方では感覚態として現出することを意味している。

同様に、今左手に関して述べたことは、当然右手にも当てはまる。したがって、「我々はそのような感覚を二重に両方の( beide )身体部分で感じることになる。なぜなら、どちらの身体部分も他方に対しては接触し作用する外的事物であると同時に、どちらも身体だからである。引き起こされた感覚はすべてそれぞれ局所づけられ、そしてそれらは、現出している身体性(Leiblichkeit)の部位(Stelle)によって区別され、現象としてその身体性に含有される」(IV,145)。このようにして「身体は本来二重の仕方で構成されることになる」(IV,145)。すなわち一方では物理的事物として、他方では身体の「表面に」そして「内部に」局所づけられた感覚態として構成されるのである。

視覚や聴覚なども局所づけられるが、それらは第一次的に局所づけられる諸感覚との共働においてである。「目は触れられることによって、自ら触感覚と運動感覚を生じさせるからこそ、目は必然的に身体の一部として統覚される」(IV,148)。このようにフッサールにおいては身体構成に果たす触覚の役割が重視されている。「身体が自身を身体として構成できるのは、根元的には触覚(Taktualität)と、そして触感覚とともに局所づけされる暖かさ、寒さ、痛みのようなあらゆる感覚によってのみ」(IV,150)である<sup>(3)</sup>。

このようにして構成される身体は、「感覚態の担い手」であり「局所づけの領野(Lokalisationsfeld)としての身体」である。そしてこの諸特徴は、あらゆる物質的な事物から身体を区別するその他の様々な諸特徴の前提となる(IV,150)。すなわち身体は自発的に自由に動かすことができる「意思の器官」であり、また他の諸事物を間接的に思い通りに動かすための「手段」でもある。さらに感性的な感情である快楽や苦痛の感覚、爽快感や不快感、活力の緊張や弛緩の感覚、また抑制・無気力・解放感などの感覚もまた、すべて感覚態として身体の内部に直接局所づけされる(IV,153)。こうして自分自身を構成する主観は、「諸感覚が局所づけされる領野としての身体を具有する一個の自我」となるのであり、身体や諸器官を自由に動かし外界を知覚する「能力(Vermögen)(私はできる(Ich kann))」をもつものとされる(IV,152)。

### 3. 二重感覚の再考

以上フッサールによる二重感覚の構成分析を概観し、身体性の構成について素描した。しかしここでもう一度、二重性の意味について考えてみたい。先の右手で左手に触れる事例からは、二つの二重性が見いだされるように思われる。

考察の端緒として、フッサールが挙げたガラスの文鎮に指で触れる場合を考えよう。文鎮

(3)

に触れる指には、文鎮の滑らかさや冷たさが感じられる。しかしフッサールによれば、「私が自分の手や指に注意を向ければ、指には触感覚があるのを感じ、しかも手を文鎮から離れた後も、それらの感覚はまだかすかに残っている」(IV,146)。つまり文鎮の徴表として統握される触感覚は、同時に「文鎮が手に及ぼす接触作用(Berührungswirkung)と手に生じる感覚態としても機能している」(IV,146)のである。これらの記述が意味することは、ガラスの文鎮に指で触れる場合にも、触れる指の方には徴表としての触感覚と局所づけられた感覚態とが見いだされるということである。つまりこれらの記述は、身体が相互に接触せずとも、感覚の局所づけが果たされることを示すものに他ならない。フッサール自身、この文鎮に触れる事例を取り上げた直後で「手と手が触れ合う場合の関係も同様である」(IV,147)としている。つまり右手が左手に触れる場合においても右手で文鎮に触れる場合においても、同様の仕方でも局所づけが見いだされるということである。むしろ文鎮に触れる場合では手と手が触れる場合とは異なり、文鎮の側に触感覚が局所づけられるなどということはない。しかし触れている指の方に「注意を向ければ」、触感覚が局所づけられていることがわかる訳である。

我々がここで考えなければならないことは、今述べた身体構成に関わる二つの事例が、全く同じであるのかどうかということである。換言すれば、フッサールが最初に提起した身体が身体に触れること(右手が左手に触れること)には、身体構成という点において何か特異なものがあるのか認められるのか否かということである。

この疑問に対しフッサールは、右手が左手に触れる場合は「いっそう複雑」で、「我々は二つの感覚〔右手が持つ感覚と左手が持つ感覚〕を持ち、しかもそのどちらも二重の仕方〔徴表としてあるいは感覚態として〕統握され経験される」(IV,147)のだと述べている。しかしここに我々は、二つの二重性を見て取ることができよう。すなわち①二つの手が感覚し合う二重性(相互性)と②同じ触感覚が統握されるその統握の二重性という二つの二重性である<sup>(3)</sup>。

そもそもフッサールが二重感覚について論じた意図は、感覚器官が局所づけられていること、すなわち身体が「感覚態の担い手」あるいは「局所づけの領野」であることを構成的に示す点にあったと考えられる。しかし文鎮の例に認められるように、その構成が身体相互の接触到必ずしも基づかないということになれば、「右手が左手に触れる」というフッサールが挙げた事例は、宙に浮いた形になる。そもそもこの事例は、「身体を介して知覚され、空間的に経験される物体(Körper)が、身体物体(Leibkörper)そのものであるという特殊事例」(IV,144)として選ばれたのであるが、身体構成という観点から再度考察し直すとすれば、どのような点にこの事例の意義を求めることができるのであろうか。フッサールが「二つの感覚」あるいは「二重の感覚」という場合には、もっぱら前述の①の二重性を問題にしているように思われるが、身体構成の分析が「局所づけの領野」として結果するのであれば、①の二重性は本質的なものではないように思われる。フッサール自身が意図せずして行っている

二つの二重性に関する分析は、身体構成の分析においてどのような位置づけを得たらよいのであろうか。

#### 4. 二重感覚の意義

問題の事態を考察するために、新たに次のような場合を考えてみよう。例えば両方の手を胸の前で合わせているという場合、どちらが触れる手でどちらが触れられる手だろうか。これは見方に応じてどちらも「触れる」手であると言えるかもしれない。しかしこの場合には、そもそも「触れる－触れられる」という関係が現出していないと言うべきではないか。この事態が「触れる－触れられる」関係として現出するためには、あらかじめどちらの手も主体の自由にできるものとして統握されており、さらにそのどちらかの手に主体の能動性が読み込まれるのでなければならない。一方が「触れる」感覚器官としての身体であり、他方が「触れられる」物質的事物としての身体でありうるのはその限りにおいてであろう。

こうした考察から明らかになることは、右手が左手に触れるという二重感覚の事例が、すでに身体分枝としての右手と左手の分節化を前提にしてこそ、初めて成立しうるということである。つまり右手と左手の「触れる－触れられる」という関係における二重感覚は、すでに右手と左手がもつ「能力」を前提とした反省による相互同定とでも言うべきものなのである。それゆえこの二重感覚は、自我の反省作用が関わる能動的な構成次元に属するものと見なすべきである。したがってこの「触れる－触れられる」関係が現出するということ（①の二重性）と、触感覚が局所づけられること（②の二重性）とは、やはり区別されなければならない。

フッサール身体論の後継者とも言えるメルロー＝ポンティは、この二重感覚について「触れる－触れられる」の関係を可能にするものを「一種の反省作用」(PP,165)<sup>(4)</sup>であるとしている。メルロー＝ポンティによれば二重感覚とは、「二つの手がそれぞれ触れるものと触れられるものとの機能のなかで交互に交代できるような曖昧な体制」(PP,165)の問題なのであり、さらに「私の身体は、それが世界を見たり、それに触れたりしている限りでは、見られも触れられもできない」(PP,163)と述べている。

メルロー＝ポンティが言うように、前述した①の右手と左手の「触れる－触れられる」という二重性は、両手の区別がすでに与えられた（身体としてそのような統覚がなされた）後の一種の反省作用によって成立しうるものと解すべきである。右手が左手に触れている限り、右手は触れられるものとなることはできない。前述した①の二重性は、本来交互にしか交代できない反省の視点変更を、あたかも二重にしかも同時に可能であるかのように見せているに過ぎないのである。つまり局所付けによる身体構成において、①の二重性で前提にされているような「右手」と「左手」の区別を括弧に入れるとすれば、右手が左手に触れる際に右

手に局所づけられる感覚態は、右手が事物に触れる場合に右手に局所づけられる感覚態と、局所づけという点においては本質的差異を持ち得ないことになろう<sup>(6)</sup>。しかしそれでは身体が身体に触れる際に起こる①の相互性の意味での二重感覚には、身体構成における固有の意義は見いだされないのであろうか。

物理的事物に触れるのであれ、身体に触れるのであれ、諸々の感覚はキネステーゼ感覚と結びついて、私たちが普段「身体」と呼ぶ空間事物に局所づけられる。あるいはもっと適切な言い方をすれば、感覚器官の局所づけにより、身体空間は「感覚態の担い手」として構成されるのである。その中で、各々の感覚器官が相互に局所づけ合うことの積極的な意義を見いだすとするれば、それは身体空間がもつ絶対性の保証という点に見いだされるのではないか。例えば私たちは通常目を閉じていても自分の鼻の頭に指先で触れることができ、間違えて眉に触れてしまうということはない。また顔をどのような方向に向けたとしても、やはり私は鼻の頭に指先で触れることができる。こうしたいわゆる「身体図式」という言葉によって説明される次元でこそ、身体が相互に触れあうことは身体構成において積極的な意義をもつように思われる<sup>(6)</sup>。かくして身体は、空間内のどこにその位置を占めるのであれ、またどのような運動のさなかにあるのであれ、絶対的な「ここ」、空間座標の「零点」たりうると考えられるのである。

以上、フッサールによる二重感覚の分析を再考することから、次のことが明らかとなる。まず前述②の二重性のうちには触感覚の局所づけという側面が見いだされ、身体が「局所づけの領野」として分析されること。次に前述①の二重性からは、その二重性がすでに身体統握を前提にした反省に基づくものであって、その分析は前提された「能力」すなわち「私はできる」を相互に同定し合う意義を持つということ。しかし今述べた身体統握を括弧に入れてその意義を見直すとすれば、身体が相互に触れ合う際の局所づけには、局所づけ相互の絶対的な身体空間を構成する意義が考えられるということである。

しかしこのような二重感覚にもとづいた身体の構成分析においては、身体が「私はできる」という「能力」を持つこと自体が、いまだ構成的に導かれていないことは明らかであろう。つまり①の二重性に見られた右手と左手がもつ「能力」の相互同定は、「能力」を確証し合うものではあっても、その「私はできる」の原初的な創設(Urstiftung)を解明するものではない。身体を問題とする我々は、「能力」すなわち「私はできる」が身体のノエマとしてどのように構成されるのかをさらに問わなければならない。この自己の「能力」を知る統覚(統握)は、あくまで人格的なものである。したがって二重感覚の分析では解明されなかったこの問題を、我々は「私はできる」の自己統覚として、次に人格的自我の自己構成のうちに問うこととする。

## 5. 人格的自我の構成

フッサールは純粹自我による人格としての自己統覚について次のように述べている。

「純粹な意識の同一的主観としての各々の純粹自我は、彼の環境世界に対し一定の性質を持った振る舞い方を有する何かとして、それによって能動的かつ受動的な振る舞い方で動機づけされうる一定の様式を持つ何かとして統握可能である。各々成長し発展させられたものは、それ自身をそのように統握し、自らを人格として見いだす」(IV, 326)。

この記述からは、純粹自我による自己統握がすでにそれ以前の意識作用による環境世界との関わりを前提としていることが分かる。つまり意識主観は人格的自我としての統握を果たす以前にすでに機能しており、人格的自我に先立つ意識生を営むものとされているのである。フッサールによれば、この先自我的意識生において、「主観は最初に自らを経験するのではなく、自然諸対象、価値的事柄、諸道具などを構成する」。つまり「主観は能動的なものとして最初に構築され形作られるのではなく、諸活動のための事柄を構築し形作る」(IV, 252)のである。そのため「経験の端緒では、まだ何ら構成された『自己』は対象として前もって与えられていないし存在していない」(IV, 253)。「私」あるいは「自己」についての意識は主観に初めから与えられている訳ではない。自我は自己反省以前にさまざまな関わりを環境世界との間で果たしているものであり、反省による主題化以前の意識作用は、先所与としての環境世界や反省以前の心理物理的(psychophysisch)自我を未規定性の地平として構成しているのである。したがって、二重感覚の分析から析出された「局所づけの領野」としての身体構成もまた、この先反省的意識生の段階に位置づけられよう。

ここで我々は、純粹自我、反省による主題化以前の自我(先反省的意識生)、自己意識を伴った人格的自我の三つを区別することができる。純粹自我は、すでに環境世界のうちに展開している意識生すなわち意識体験の流れを人格的自我として統握する。この意識体験の流れは発生の連合法則にもとづく諸連関であるが、それは人格的自我の「『説明』のための前提」となり、「諸状況と関連する自我のその同定のための前提」となっている。フッサールは自己反省を「『私は生きる』の特殊様態」としているが、先反省的な意識生にこのような眼差しが向けられることによって、「私は私の非反省的な自我生について知り、反省はそのような自我生の諸構造を、気づき(Bemerken)の視点で私にもたらす」(IV, 248)ことができるのである。これが自己統覚に他ならない。自我は反省を通じて「自らを知るようになる」のであり、フッサールにおいてそれは、自己構成の展開と一つなのである。そのため、「純粹意識の体験経過(Erlebnislaut)は、必然的に発展進行(Entwicklungsverlauf)であり、その発展進行において、純粹自我は人格的自我の統覚的形態を受け取らねばならず、したがって様々な志向の核にならなければならない」(IV, 251)とされるのである。このようにフッサールは、自我が自己の意味内容を獲得し、さらに豊かに発展していく過程を発生的なものとして論じている。

こうして人格的自我は、本能に駆り立てられ、ただそれに従う自我としてだけでなく、より高次の理性的動機づけによって導かれる自我としても構成されるのである(IV,252)。

しかしフッサールはこうした自らの分析について、「人格的自我が自我反省にもとづいて、したがって全く根源的に純粋な自己知覚や自己経験にもとづいて構成されるのか」(IV,251)という疑問を投げかけている。この問いは、そもそも純粋意識が如何に自らの先反省的自我生に眼差しを向けることができ、それを人格的自我として統握することができるかを問うものである。意識体験自体は、内的時間意識によって統一した一つの流れを形成している。しかしその意識流の一貫性が、直ちに人格的自我の持つ「自己」の意識を意味するわけではない。フッサールが提起した先の問いは、他の主観とは異なるものとしての「私」や「自己」としての主観の自己統覚を問うものであろう。だがこれまでの自己統覚に関する一般的な発生分析では、その側面が十分にとらえられていない。やはりそこには何らかの他者の契機が必要とされるように思われる。

そこで身体がもつとされた「私はできる」という自己統覚について、その分析を進展させるため、次に他の人格的自我との了解的(komprehensiv)経験を取り上げたい。その経験に特有の形式からは、問題の自己統覚が果たされる可能性が見いだされるように思われる。

## 6. 了解的経験の形式と自己統覚

我々は他者と出会ってもそれを単なる事柄(Sache)や物体と見なすのではなく、直ちに私と同じ人格的主観として理解する。このとき出会った身体は、「精神の表現(Ausdruck)」として受け取られ、表情や身振り、語り出された言葉が、単なる物体の運動や無意味な雑音としてではなく、まさに人格的生の表現として受け取られる。こうした意味において我々は独我論的に存在するのではなく、共属する人格的連帯(Personalverband)のうちに存在するのであり、共通の環境世界に属している。そしてフッサールによれば、「共通の環境世界への関係が了解(Komprehension)を打ち立てる場合に、各々の自我は初めて自身と他者に対して通常の意味での人格に、人格的連帯のなかの人格になることができる」(IV,191)のである。では、我々はこの「了解的経験」をどのようにして打ち立てているのであろうか。

この問題を考察する上で注目すべきことは、人格相互が了解を打ち立てるといような人格的作用(Wirkung)には、物理的事物の経験の仕方とは異なった「人格が人格に働きかける形式がまさに他にある」(IV,192)ということである。少し長くなるがフッサールの文章を引用する。

「諸人格は、その精神的な行為において(自我が他者にまた逆の向きに)お互い向き合い、諸人格はその相手について理解するようになるという意図(Absicht)、そして(そのようなねらいで外化されたものとしての)こうした諸作用の理解しつつ把握する働きにおいて、その

相手に特定の人格的な振る舞い方をする気にさせるというそうした意図において、諸作用を遂行する。反対に、そのように規定された人はこうした影響(Einwirkung)へ自発的に進み入ることができ、あるいは嫌々ながらそれを拒絶することができ、そして彼自身の側では、彼がそれにしたがって行為するだけでなく、気乗り(Willigkeit)や気乗りのなさ(Unwilligkeit)を伝達(Mitteilung)を通じて理解させることによって、彼を規定している人を再び反応する気にさせることができる」〔傍点は引用者による〕(IV,192)。

この記述に見られるように、人格的作用は「相手について理解するようになる」意図と同時に、「相手に特定の人格的な振る舞い方をする気にさせる」意図を併せ持っている。我々の問題は「私はできる」という自己統握であったが、その統握にとって重要となるのは、相手を規定しつつ、相手を反応へと動機づける後者の意図であるように思われる。そこで後者の意図が如何にして「自己」への意識対向を促し、さらに「できる」という意味の構成と関わるかについて具体的に例を挙げながら考えてみたい。

まずは赤ん坊が声をあげて泣いている場合を考えよう。その子は本能や欲求、あるいは何らかの不快な感情にもとづいて泣いているものと考えられる。しかし我々は赤ん坊に対し、必ずと言っていいほど「おなかがすいたの?」とか「(おむつが濡れて) 気持ち悪かったんだね」などと声をかけ、赤ん坊の振る舞いを人格的に扱おうとする<sup>(9)</sup>。つまり「特定の人格的な振る舞い」をそこに見いだそうとするのである。

確かに赤ん坊の行動は、「ミルクをくれ」とか「おむつを換えてくれ」などの理由によるものであろう。しかしそれを誰かに伝えようとか、その対応を相手に求めようとかいう意図は含まれていないように思われる。なぜならその場に誰もいなくとも、赤ん坊は不快であれば泣いているものと考えられるからである。もっとも我々は、赤ん坊の泣くという行為が、誰かに対応を求める意図を含んでいるのか否かを実際に確認することはできない。しかしそれにもかかわらず、我々はその赤ん坊の振る舞いのうちに、我々に対し「特定の人格的な振る舞い方をする気にさせる」意図を勝手に読み込んでいるのである。

この事例から伺えることは、「人格が人格に働きかける形式」においては、単に動物的な本能的欲求にもとづく身体行動があったとしても、それが人格の「表現」として理解され、その結果その身体が「人格的な振る舞い方をする気にさせる意図」を持つものとして扱われるということである。そして赤ん坊の側では、本能的な身体行動に応じる形で不快な原因が取り除かれる結果、その赤ん坊の単なる「なす(tun)」行為には初めて「できる(können)」という意味が結びつくことになるのである。

このような経験を繰り返すことで、赤ん坊は自分の振る舞いが周囲にとって影響力を持ち、環境を変える力があることを理解できるようになる。「なす」は他者によって推測された動機づけ連関に位置づくことで、初めて単なる物理的事物の運動としてではなく、その「主体の

(9)

『なす』として扱われる。そしてその結果として変容する環境が、「なす」の主体にそれ以上の意味「できる」を獲得させると考えられるのである。身体がもつとされた「能力」の自己統覚は、このような経験によって構成されてくるのではないか。

こうした経験はその発達段階に特有のものと思えるかもしれない。しかし自己そのものへの対向を促すような経験は、赤ん坊に限って生じることではない。例えば無意識のうちに現れ出た表情や行動が他者の目にとまり、「何を苛々しているんだ」とか「楽しそうだね」などといった働きかけを我々は受けることがある。あるいはまた自分の振る舞いが、意図せずして他者から評価を受けるといったこともある。我々はそのような働きかけを通じて、自分の肉体的・心理的状态やある振る舞いが何らかの価値を持つことに気がつくのである。これらの例において重要となるのは、反省以前の自我生へと対向を促す契機が、外部からもたらされているという点である。そもそもそれ以外に、自我は自らの意識生や心身の状態に目を向けるという視点をどのようにして獲得しうるのであろう。これは反省そのものの、ひいては自己統覚そのものの超越論的条件にも関わる問いであろう<sup>(8)</sup>。

赤ん坊の例も先の先反省的な自我へと対向が触発されるという例も、どちらの例においても主体が「なす」振る舞いは、他者によって推測された動機づけ連関のうちに置き入れられて理解されている。この場合、他者による推測が的中するかどうかはあまり重要ではない。重要であるのは先反省的な自我生「なす」に対し、一方では他者が「他者に応答する気にさせる意図」をそこに見ることで、彼が「なす」に至った動機づけ連関を推測し、さらにそれに対する応答へ動機づけられるという点であり、また他方では、先反省的自我がそのような他者からの応答を「こうむる」過程において、結果として身体が持つ「能力」や先反省的な自我生、すなわち「自己」に意識が対向するという点なのである。

「なす」は第三者によって推測された動機づけ連関に位置づいたとき、初めて他者との関係のうちで「私」や「できる」の意味を持ちうる。自我はこのような人格主義的態度における了解的経験を通じて、諸能力の主体としての自己統覚を果たすのであり、それ以後はその能力を用いて主体として自由に行為することになる。主観はそのための「原能力(Urvermögen)」(IV,255)を持ち、また人間の発達段階に応じて「能力の組織体(Organisumus von Vermögen)」(IV,254)として構成されるのである。

## 結語

フッサールによる二重感覚の事例を再考することによって明らかになったことは、フッサールの二重感覚には二つの側面があるということであった。一方は局所づけにもとづく身体構成の分析という側面であり、他方は身体部位が有する「能力」の相互同定という側面である。後者は身体が持つ「能力」を確証し合うものであるが、こうした二重感覚の分析はその

「能力(私はできる)」という自己統覚の構成までをも解明する分析とはなりえていなかった。自然主義的態度において、「感覚態の担い手」、「自由な運動の器官」、「空間構成の中心」として構成される身体は、確かに主観が世界に働きかけるために必要な「原能力」を有している。しかしこのすでに与えられた身体は、直ちに「私はできる」という自己統覚を保証するものとは言えないのである。この自己統覚は人格主義的態度における自我の自己構成の問題として改めて提起されなければならなかった。そこで我々は、続いてフッサールの人格的作用に特有な形式の記述に依拠することで、身体を媒体とした他者との了解的経験によってこそ、自我は自己への対向を触発され、自己統覚が可能となることを明らかにした。したがって身体構成をめぐる問いは、その「能力」すなわち「私はできる」を人格主義的態度における了解的経験に基礎づける必要性があることを明らかにしたのである。

しかし以上の結論をより確実なものとするためには、本稿では論及できないまま残されている課題も多い。第一に自己統覚以前の先反省的・先自我的な意識生を生きる主観には、どのような能力を付与しうるのが改めて問われなければならないであろう。フッサールにおいて自我の能動的な意識に対する先反省的・先自我的な意識体験の領域は、受動的総合の領域とされる。その領域における意識主観の権能については、改めて『受動的総合の分析』などにおける考察から詳細に解明される必要があろう<sup>(9)</sup>。『イデーⅡ』では主観に「原能力」があることが示唆されていたが、その具体的中身は決して明らかではないのである<sup>(10)</sup>。またそれと関連して、第二に「人格が人格に働きかける形式」が、どのような条件において適用されるのかについても考察される必要があろう。我々は人格的自我あるいは人間自我(Menschen-Ich)ではないものにも、時に人格的に働きかけるからである。これらの論点をふまえた更なる人格性(Personalität)の分析が求められる。さらに本稿の「私はできる」という自己統覚に関する分析が、他者経験の解明や超越論的相互主観性論とどのような整合性を持ちうるのかについて、考察の範囲を拡大して論じる必要もあろう。論及することのできなかったこれらの問題については今後の課題としたい。

#### 註

(1) E. Husserl, *Husserliana Band IV, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, zweites Buch, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1952.

以下、フッサール全集(Husserliana)からの引用は、その巻をローマ数字、ページをアラビア数字で略記する。なお原文のグッシュベルトによる強調は省略し、引用者による註は〔 〕を用いて本文中に付すこととする。

(2) このような直接的な触感覚以外にも、フッサールは「手を動かしても何ものにも触れないような場合」(IV, 151)を挙げ、その際にも運動感覚が感じられ、筋肉の緊張感覚や触感覚とともにそれが手に局所づけられるとしている。

(3) 別の箇所でもフッサールは、「同じ触感覚が外的客観の徴表としても、かつまた身体としての客観(Leib-Objekt)を感じる触感覚としても統握される」と述べ、それに続けて「ある身体部分が別の身体部分によっては同時に外的客観でもある場合、我々は二重の感覚を持ち(すなわち双方の身体部分がそれぞれ感覚しあい)、そして物理的な客観としての双方の身体部分の徴表をそれぞれが統握するという二重の統握をすることになる」(IV,147)と述べている。前者は②の、後者は①の二重性を示すものであろう。

(4) M.メルロー＝ポンティ、『知覚の現象学 I』、みすず書房、1967。

以下、同書からの引用は書名をPPと略記しページ数を付す。なお、「一種の反省作用」をメルロー＝ポンティはフッサールの『デカルト的省察』から引用している。

(5) ただし、ここではあくまでも「局所付け」という身体構成に関わる次元のみが問題とされている。手が手に触れる場合と事物に触れる場合とでは、当然その徴表(Merkmal)に質的差異があり、手が相互に触れる場合には独特の温度、柔らかさ、肌理等があって、当然その同定には不可欠な役割を果たすものと考えられる。

(6) しかしこの点に関してはより詳細な考察が必要であらう。フッサールは局所づけが身体全体にわたって果たされることを考えているようであるが、相互的な局所づけをも含む全般的な局所づけによって、いわゆる「身体図式」のような意識が構成されるかどうかは明確でない。そうした意識の可能性については、身体全体を覆う冷暖の感覚や様々な姿勢における筋肉の緊張感覚の局所づけなどから、キネステーゼ感覚と共に詳しく分析される必要がある。

(7) フッサールは「私の観察によれば、子どもにおいて自ら発声しそして続いて似通って聞かれる声が、自我客観化(Ichobjektierung)あるいは他者(alter)の形成のための架橋の役割を最初に果たすように思われる」と述べ、「声明すること(Verlautbarung)」が自己移入(Einfühlung)以前に根本的で本質的な役割を果たすことについて言及している(IV,95)。

(8) フッサールは、「理論的見方へと移行しうる」という態度変更の可能性をも「私はできる」すなわち「能力」と見なしている(IV,11)。

(9) 意識の受動性の概念とそれに相関的な対象領域をめぐる問題については、山口一郎、「受動的発生からの再出発」(『現代思想臨時増刊号 第29巻第17号』,2001,210-229ページ)に詳細な検討がある。

(10) フッサールは別の箇所でも、人格的自我の自己統覚のためには「常にそして初めから自我的能力と下層の生体学的(somatologisch)能力とが問題になる」(IV,250)としているが、後者は「原能力」の具体的内容に関わるものであろう。

## Über die Leibkonstitution in *Ideen II* von Husserl :Überlegungen zu Husserls „Doppelempfindung“

Hideki KOBAYASHI

In dieser Abhandlung versuche ich die „Doppelempfindung“ in *Ideen II* von Husserl kritisch zu überdenken und dadurch die Leibkonstitutionslehre zu analysieren.

Die Leibkonstitution in *Ideen II* ist besonders als die „Lokalisation“ der Tastempfindung charakterisiert. Aber der Leib hat nicht nur in der doppelten Leiberfahrung („Doppelempfindung“), sondern auch in der Dingerfahrung die „Lokalisation“. In dieser Beziehung ist die „Doppelempfindung“ an sich nicht gerade das Besondere der Leibkonstitution.

Husserl unterscheidet diese beiden nicht deutlich. Aber durch die Analyse, diese beiden vergleicht, wird der Unterschied klar. Und dadurch werden auch die zwei Bedeutungen der „Doppelempfindung“ in der Leiberfahrung klar, d. h. die Bedeutung der Leibkonstitutionsanalyse als „Lokalisation“ und der Auseinandersetzung des „Vermögens (ich kann)“, das jeder Leibesteil hat.

Der Leib hat zwar das „Vermögen (ich kann)“, aber es gehört nicht von vornherein selbstverständlich zu ihm. Es muss als eine Selbstapperzeption auf der „komprehensiven Erfahrung“ in der personalistischen Einstellung begründet sein. Ich möchte das über die Betrachtungen von „eine andere Form des Wirkens von Person auf Person“, d. h. von der eigentümlichen Form der „komprehensiven Erfahrung“ beweisen.